

援助行動を含む鬼ごっこ（お助け鬼・なかま鬼）への参加が 児童の援助自己効力感に及ぼす影響

上 野 耕 平

Effects of Participation in the Game of Tag with a Focus on Helping Others on Self-Efficacy in Helping Behavior of Children

Kohei UENO

Key words : life skills, personality development, physical education, sports

問題の所在

近年、体育の存在意義として「人間形成」への貢献が主張されている（友添，2005）。その主張には「いじめ」問題に象徴されるように、子どもを取り巻く状況が危機に瀕しているなか、体育に対して社会から寄せられる積極的な期待に応える目的と共に、社会が納得しうる体育の意義を説明する責任を果たす目的が含まれている。

まず一つ目の目的に対して友添・梅垣（2007）は、いじめや不登校、教師への暴力行為などの問題が近年頻発していることを紹介しつつ、体育授業において追求されるべき課題として、様々な運動・スポーツ技能の習熟や身体づくりに代表される体力向上のみならず、社会性や道徳性の育成についても追求されるべきであると指摘している。そしてヘリソンの責任学習理論（Hellison, 2003）を土台として、体育授業を通じて参加者の人間形成を目指す実践研究を行っている（梅垣ら，2006；梅垣ら，2011）。

次に二つ目の目的に対して梅垣・友添（2010）は、体育における道徳学習や責任学習の先行研究をレビューし、今後の研究に求められる内容として、運動やスポーツで用いられる技術そのものに含まれている、道徳性や社会性を高める要素に注目した研究を挙げている。そしてその具体例として、柔道において相手が受け身を取りやすいよう行われる投げ技後の引き手を紹介し、こうした運動やスポーツに特有な要素を利用した教授方法を開発することが、教科としての体育の存在意義を高めることに繋がると述べている。

これらの主張に鑑みるならば、今後の学校体育においては、単に運動やスポーツを人間形成の手段として用いるに止まらず、運動やスポーツに内包される道徳性や社会性の向上を促進する要素に注目した指導方略に関する研究が求められていると考えられる。

そこで本研究では、「鬼ごっこ」における援助行動に注目した。鬼ごっこは児童期に行われる運動あそびの一つであり、我が国だけでなく多くの国で行われている。そして鬼ごっこには参加者の敏捷性の発達を促進する動きが含まれており、生涯にわたってスポーツに親しむ上で必要とされる基礎的能力を培う上で、特に児童期に実施されるべき運動あそびの一つである（上田，2007）。

鬼ごっこには沢山の種類が認められるものの、鬼が逃げ手にタッチするだけの単純なルールの鬼ごっこだけでなく、鬼に捕まっている仲間を助けることのできる鬼ごっこが存在する。例えば、一般に「こおり鬼」として行われている鬼ごっこでは、鬼にタッチされて「氷った」仲間にその仲間がタッチすることにより、氷が溶けて再度動けるようになるというルールである。先に挙げた単純なルールの鬼ごっこでは、できるだけ長い間鬼にならずに逃げられることや、逃げようとする児童を素早く捕まえられることが、鬼ごっこにおける技能の卓越を示す。しかし、こおり鬼ではできるだけ長く逃げ切れるだけでなく、仲間を助けられることが技能の卓越を示しており、そのルールには仲間を助ける行動を肯定する意味が含まれていると言える。

援助行動については、人間の向社会的行動の一つとして研究が行われてきたようである。田崎（1993）は児童・生徒の向社会的行動についてレビューするなかで、その中心として分与行動と共に援助行動を位置づけている。そして援助行動を促進する要因として、時間的余裕や援助にかかるコストなどと共に、過去の援助経験によって得られた肯定的な気分があることを示している。永井（2011）もまた、これまでの援助行動に関する研究をレビューし、援助行動を促進する個人内要因の一つとして過去の援助経験を挙げている。これらの研究成果は、他者を援助することによって得られる肯定的な気分や援助の成功経験が、次に援助が求められる事態に遭遇した際の援助行動を促進する可能性を示している。従って、たとえ鬼ごっこの場面であっても、援助経験を重ねることにより、児童の援助行動を促進できるのではないかと考えられた。

なお本研究では鬼ごっこにおける援助経験に関して、上野（2014）が作成している児童用援助自己効力感尺度を用いて、他者を援助できるだろうという効力の予期である、援助自己効力感を測定する。児童が家庭や学校生活において行う援助行動そのものを測定することは簡単ではない。しかし上記尺度で測定される援助自己効力感は、児童の日常生活場面における援助行動との間に中程度の相関関係が認められることが確認されており、援助自己効力感により、児童の日常生活場面における援助行動をある程度予測できると考えられた。

また本研究では、鬼ごっこにおいて他者を援助することがあそびの中心的課題となるようルールを整え、「お助け鬼」と「なかま鬼」という2つの鬼ごっこを新たに開発した。後述するとおり、両鬼ごっこ共に仲間を助けることが技能の卓越を示すよう考案されているほか、できるだけ道具や場所を選ばず、体育や野外活動において実施しやすいルールとなっている。これら援助行動を含む鬼ごっこに参加する中で援助経験を重ねることにより、援助行動に対する自己効力感を高め、ひいては日常生活場面における援助行動を促進するのではないかと考えられた。

以上の通り本研究では、援助行動を含む鬼ごっこ（お助け鬼及び、なかま鬼）を開発し、鬼ごっこへの参加が児童の援助自己効力感に及ぼす影響について明らかにすることを目的とする。

調査1：お助け鬼への参加前後における援助自己効力感の変化

1. 方法

1) 調査対象者

本研究者が実施している本学附属小学校 2・3 年生児童を対象とした学童保育活動（キッズスポーツアンドスタディサポート：以下、キッズサポートとする）の参加者 24 名の内、当日の活動に参加した 21 名（3 年生：男子 7 名、女子 5 名、2 年生：男子 6 名、女子 3 名）を調査対象者とした。

2) 手続き

キッズサポートは夏期と秋期にそれぞれ 8 週間に渡って毎週水曜日の放課後に実施され、勉強の時間約 30 分と運動あそびの時間約 1 時間から構成されている（表 1）。さらに運動あそびの時間は、1) ウォーミングアップを兼ね、細かいステップ動作や手足の協応動作に注目した動きの土台づくり、2) 鬼ごっこやボール送りなどを実施する敏捷性の土台づくり、3) 投げる、蹴る、転がすなどボールを利用したスポーツの土台づくりに分けられる。お助け鬼はこの内、敏捷性の土台づくりを行う時間に行われ、参加人数や広さを改変しつつ 3 週に渡って試行的に実施された後、最終週に本調査が行われた。

キッズサポートへの参加は任意であり、希望者のなかから無作為抽選によって選ばれた児童が参加した。またキッズサポートへの参加に際しては、スポーツマンシップに焦点を当てた介入研究を実施する旨について募集要項に明示し、介入研究への同意を得た。なお調査 1 及び調査 2 を含む研究の実施に先立ち、本研究者が所属する組織に研究計画書を提出し、研究倫理に関する審査を経た上で実施した。

表 1 キッズサポートの構成

	活動内容	時間	場所
1	勉強の時間	30分	講義室
	・宿題、課題の実施		
2	運動あそびの時間		体育館
1)	動きの土台づくり	20分	
	・ステップ動作		
	・手足の協応動作		
2)	敏捷性の土台づくり	20分	
	・鬼ごっこ		
	・ボール送り		
3)	スポーツの土台づくり	20分	
	・投球動作		
	・蹴球動作		
	・打球動作		

3) お助け鬼

緒言でも述べた様に、鬼ごっこには参加者の敏捷性の発達を促進する動きが含まれており、生涯にわたってスポーツに親しむ上で必要とされる基礎的能力を培う上で、特に児童期に実施されるべき運動あそびの一つであると言える。他方、体育・スポーツ活動において尊重される「ルールを守る」、「仲間を助ける」などの行動は、日常生活への般化が期待されるスポーツマンシップ行動であり、これらの行動を含む鬼ごっこを開発することにより、児童の敏捷性の発達に加え、スポーツマンシップ行動を促進することができると考えられた。

本研究において開発する「お助け鬼」は、「仲間を助ける」ことに注目した鬼ごっこである。本研究で実施したお助け鬼は体育館に描かれたラインを活用した、縦 9 メートル、横 6 メートルのグリッドを 1 面として、4 面に分かれて実施された。鬼は 1 人とし、逃げる側（以下、逃げ手とする）は 5 人とした。逃げ手はグリッドの外に出ることはできず、鬼は逃げ手にタッチすることで、鬼が交代となる。しかし、鬼は手をつないでいる逃げ手にタッチすることはできないほか、逃げ手は何度でも手をつなぐ相手を変えることができる。従って、逃げ手は鬼に捕まらないようにまだ手をつないでいない仲間を探す一方、鬼に捕まえられそうな仲間の手を差し伸べることで、仲間を助けることができる。なお、お助け鬼の実施前に、仲間とつないだ手を離さないで自分だけが助かるのは簡単であるが、助けを求めている仲間を助けようとするに価値があることを説明した。

本調査では学年及び性別がなるべく異なるように配慮された 4 つのグループに分かれて実施し、参加者が 6

人に足りないグループにはキッズサポートを補助している大学生が加わった。実際に活動した合計時間は 5 分程度であった。

4) 質問紙

上野（2014）は、吉村（2003）が作成した小学生用の向社会的行動尺度に含まれる「援助行動」に関わる項目を下敷きとして、現職教員の意見を参考に、児童用援助自己効力感尺度を作成している（表 2）。同尺度は 10 項目から構成され、児童の日常生活場面における援助行動に対する効力感（他者を助けることができるという効力の予期）を測定することができる。同尺度は探索的因子分析により 1 因子構造であることが確認されており、また確証的因子分析の結果、1 因子からなるモデルの適合度は十分な値を示していた。また、10 項目の内的一貫性 ($\alpha=.86$) も高く、児童用社会的スキル尺度（石川・小林, 1998）及び児童用共感測定尺度（桜井, 1986）との相関（それぞれ、 $r=.77$, $r=.48$ ）が認められたほか、児童の過去 1 週間の援助経験との間にも相関 ($r=.50$) が認められており、尺度の信頼性及び妥当性についても確認されている。尺度への回答は、1) できないと思う、2) たぶんどけないと思う、3) たぶんどけると思う、4) できると思うの 4 件法により実施した。児童はキッズサポート開始前の集合時及び、お助け鬼参加後の休憩時に、調査者が質問を読み上げるスピードにあわせて質問紙に回答した。

表 2 児童用援助自己効力感尺度（上野, 2014）の質問項目

1	チームを作ってあそぶとき、うんどうのにがてな子も入れる
2	教室でけんかしている子がいたら、先生をよびに行く
3	先生がにもつをはこんでいるときに手つだう
4	なっている子に「どうしたの？」と声をかける
5	かさをもっていない子を自分のかさに入れる
6	かかりや日直のしごとを手つだう
7	先生にしかられた子をなぐさめる
8	あぶないところであそんでいる子にちゅういする
9	あそぶとき、教室でひとりになっている子もさそう
10	しっばいしておちこんでいる子をはげます

2. 結果

お助け鬼への参加前後における援助自己効力感の変化

お助け鬼への参加前後において、児童の援助自己効力感に認められた変化について検討する目的で、対応のある t 検定を実施した。その結果、お助け鬼参加前 ($M=33.05$, $SD=6.85$) と参加後 ($M=33.38$, $SD=7.24$) の児童の援助自己効力感の値に有意な差は認められなかった ($t(20)=.39$, $p=.70$)。本結果は、お助け鬼に参加しても、児童の援助自己効力感はほとんど変化しないことを示していると考えられた。

調査 2：しっば取り及びなかま鬼への参加前後における援助自己効力感の変化

1. 方法

1) 調査対象者

キッズサポートの参加者 24 名の内、しっば取りについては 23 名（3 年生：男子 4 名、女子 2 名、2 年生：男子 10 名、女子 7 名）、なかま鬼については 21 名（3 年生：男子 4 名、女子 2 名、2 年生：男子 10 名、女子 5 名）を調査対象者とした。なお本調査の対象者に調査 1 の対象者は含まれていない。

2) 手続き

調査 2 は夏期キッズサポートにおいて実施された。キッズサポートの基本的内容は調査 1 と同じである。なかま鬼は敏捷性の土台づくりを行う時間に行われ、参加人数や広さを改変しつつ 2 週に渡って試行的に実施された後、第 6 週に本調査が行われた。しっぽ取りについては全ての児童が小学校ほかで既に経験していたことから、当日の説明のみで最終週に行われた。本調査に関する保護者への告知及び同意の取得は調査 1 と同様に実施された。

3) 鬼ごっこの説明

しっぽ取り：しっぽ取りでは全員が逃げ手と鬼の役割を果たす。参加者は学年及び性別がほぼ均等となるように、本研究者によって予め 2 つのグループに分けられ、それぞれしっぽ取り用に市販されている、長さ 40 センチ、幅 5 センチのしっぽを腰の部分に装着した。参加者が少ないグループにはキッズサポートを補助している大学生が加わり、人数を調整した。開始の合図の後、相手のグループの児童のしっぽを互いに取り合い、しっぽを取られた児童はその場に座った。本調査は本学体育館のほぼ全面（縦約 30 メートル、横約 20 メートル）を利用して実施した。なお本調査では、開始後しばらくして片方のグループに所属する全員のしっぽがなくなったことから、一度しっぽを返し合った上で、再度実施した。実際に活動した合計時間は 5 分程度であった。またしっぽ取りはルール上、援助行動を含んでいないことから、本研究では、お助け鬼及びなかま鬼との比較のための活動（統制群）として位置づけている。

なかま鬼：本研究において開発する「なかま鬼」は、多くの児童が 1 つのグループで活動できるよう「お助け鬼」に修正を加えた鬼ごっこである。本調査では、なかま鬼は体育館に描かれたラインを活用した、縦約 20 メートル、横約 12 メートルのグリッドを 1 面として、2 面に分かれて実施された。鬼は 1 人とし、逃げ手は 2 人で手をつないだペア 5 組とした。逃げ手はグリッドの外に出ることはできず、鬼は逃げ手にタッチすることで、鬼が交代となる。しかし、鬼は他のペアと手をつないで 4 人組になっている逃げ手にタッチすることはできないほか、逃げ手は何度でも手をつなぐペアを変えることができる（ペアの相手は鬼に捕まった時を除いて交代しない）。従って、逃げ手は鬼に捕まらないようにまだ手をつないでいないペアを探す一方、鬼に捕まえられそうなペアに手を差し伸べることにより、仲間のペアを助けることができる。なお、お助け鬼の実施前には、仲間ペアとつないだ手を離さないで自分達のペアだけが助かるのは簡単であるが、助けを求めている仲間のペアを助けようとするに価値があることを説明した。本調査では学年及び性別がなるべく異なるように配慮された 2 つのグループに分かれて実施し、参加者が 11 人に足りないグループにはキッズサポートを補助している大学生が加わった。実際に活動した合計時間は 5 分程度であった。

4) 質問紙

児童用援助自己効力感尺度：調査 1 と同様に、上野（2014）が作成した、児童用援助自己効力感尺度を用いた。尺度への回答方法についても調査 1 と同様に 4 件法で実施した。

援助・被援助行動に関する質問：なかま鬼のルールは、鬼から仲間を助けられることを特徴としており、その点において仲間を助ける要素を取り入れていないしっぽ取りのルールと大きく異なっている。そこで本調査ではなかま鬼の実施後に、「仲間を助ける目的」で 1) 走って近づいた、2) 手を差し伸べた、3) 自分から声を掛けた、の 3 つの側面から児童の援助行動を測定すると共に、1) 走って近づいてくれた、2) 手を差し伸べてくれた、3) 声を掛けてくれた、の 3 つの側面から児童の被援助行動を測定した。それぞれの質問への回答については、1) ぜんぜんできなかった（してくれなかった）、2) たまにしてあげた（してくれた）、3) ときどきしてあげた（してくれた）、4) よくしてあげた（してくれた）の 4 件法により実施した。

援助・被援助行動に伴う快感情に関する質問：なかま鬼参加中に経験した援助・被援助行動に伴い惹起された快感情を調査する目的で、なかま鬼の実施後に、仲間を助けた（助けてもらった）時の気持ちに関して 1) うれしい、2) 気分が良い、3) 楽しい、の 3 つの側面から質問した。それぞれの質問への回答は「はい」、「いいえ」の 2 件法により実施した。

2. 結果

1) しっぽ取りへの参加前後における援助自己効力感の変化

しっぽ取りへの参加前後において、児童の援助自己効力感に認められた変化について検討する目的で、対応のある t 検定を実施した。その結果、しっぽ取り参加前 ($M = 32.91$, $SD = 5.26$) と参加後 ($M = 33.61$, $SD = 6.65$) の児童の援助自己効力感の値に有意な差は認められなかった ($t(22) = .92$, $p = .37$)。本結果は、しっぽ取りに参加しても、児童の援助自己効力感はほとんど変化しないことを示していると考えられた。

2) なかま鬼への参加前後における援助自己効力感の変化

なかま鬼への参加前後において、児童の援助自己効力感に認められた変化について検討する目的で、対応のある t 検定を実施した。その結果、なかま鬼参加前 ($M = 32.81$, $SD = 5.20$) と参加後 ($M = 35.05$, $SD = 4.57$) の児童の援助自己効力感の値に有意な差が認められ、参加前よりも参加後の方が高い値を示した ($t(20) = 2.41$, $p = .03$)。本結果は、なかま鬼に参加することにより、児童の援助自己効力感が肯定的に変化する可能性を示していると考えられた。

3) なかま鬼への参加前後における援助自己効力感の変化と援助・被援助行動の関係

なかま鬼への参加前後において、児童の援助自己効力感が向上した群（向上群：12 名）と変化なし・低下した群（非向上群：9 名）に群分けした上で、両群間の援助・被援助行動の差異を確認する目的で t 検定を行った（表 3）。その結果、全ての行動において有意差は認められなかった。本結果は、児童の援助自己効力感の変化と援助・被援助行動との間に直接的な関係は認められないことを示していると考えられた。

表 3 援助自己効力感の向上群・非向上群における援助・被援助行動の差異

	援助行動：n/M(SD)			被援助行動：n/M(SD)		
	走って 近づく	手を差し 伸べる	声を掛ける	走って 近づく	手を差し 伸べる	声を掛ける
向上群	9/3.11(1.05)	9/3.11(1.17)	8/3.13(.64)	8/3.25(.71)	9/3.33(.71)	9/3.00(.71)
非向上群	12/3.33(1.07)	12/3.33(.78)	11/3.00(.78)	12/3.25(.87)	12/3.17(.84)	12/2.75(.75)
t 値 (df)	.47(19)	.52(19)	.37(17)	.00(18)	.48(19)	.77(19)
p 値	.64	.61	.71	1.00	.64	.45

4) なかま鬼への参加前後における援助自己効力感の変化と援助・被援助行動に伴う快感情の関係

なかま鬼への参加前後において、児童の援助自己効力感向上群（12 名）と非向上群（9 名）の間の援助・被援助行動に伴う快感情の差異を確認する目的でフィッシャーの直接確率計算を行った（表 4）。その結果、向上群と非向上群の間には、援助行動及び被援助行動の両方において「うれしさ」と「気分の良さ」を感じた人数

に有意差は認められなかった。一方で、「楽しさ」を感じた人数に関しては、援助行動及び被援助行動の両方において向上群と非向上群の間に有意差が認められ、向上群の方が楽しさを感じた人数が多い傾向が認められた。本結果は、児童の援助効力感が向上した児童は向上しなかった児童と比較して、助けること及び助けられたことに関して「楽しさ」を感じる傾向にあることを示していると考えられた。なお向上群と非向上群の間に統計的に有意な差が認められなかった快感情においても、向上群の方が非向上群よりも快感情が惹起された児童が多かった。

表 4 援助自己効力感の向上群・非向上群における援助・被援助行動に伴う快感情の差異

	援助行動に伴う快感情						被援助行動に伴う快感情					
	うれしい		気分が良い		楽しい		うれしい		気分が良い		楽しい	
	Y	N	Y	N	Y	N	Y	N	Y	N	Y	N
向上群	12	0	10	2	12	0	11	1	10	2	12	0
非向上群	7	2	7	2	6	3	8	1	6	3	6	3
Fisherの直接法	.17		1.00		.06		1.00		.61		.06	

Y: はい, N: いいえ

人

総合的考察

1. 鬼ごっこへの参加前後における援助自己効力感の肯定的変化

本研究では、本研究者が実施するキッズサポートに参加している小学校 2・3 年生児童を対象として、ルールの異なる 3 種類の鬼ごっこを実施した。その上で、鬼ごっこへの参加が彼らの援助行動に対する自己効力感に及ぼす影響について確認した結果、「しっぽ取り」及び「お助け鬼」については、鬼ごっこ参加前後における援助自己効力感に変化は認められなかった一方で、「なかま鬼」については参加後に援助自己効力感が肯定的に変化していた。本研究の参加者は 20 名程度の児童であり、結果の解釈には必ずから限定が伴うものの、本結果は「なかま鬼」が児童の援助自己効力感の肯定的変容を促進できる可能性を備えていることを示していると考えられた。

これまで運動・スポーツ経験は、参加者の人間的成長を導く活動であるとして社会から積極的な期待を受けてきた。例えば松田（1985）は、スポーツ活動に内在する教育的機能として、ルールやマナーの遵守が求められスポーツマンシップやフェアプレーの精神が尊重されること、そして、これらが具体的に身体の動きを通して、繰り返し経験されることによって身につけられることを指摘している。また加賀谷（1998）は運動部活動について、試合での勝利やプレーの楽しさといった参加者に共通する目的の達成に向けた自己錬磨の機会を通じて、連帯意識や団結心を育えると共に、周囲の人間との円滑な人間関係を営む能力を身につけることができるとしている。一般的に運動・スポーツ経験は、人間的成長に肯定的影響を及ぼす活動であると理解されてきたと言える。

一方で、経験の仕方によっては、運動・スポーツ経験が人間的成長に否定的影響を及ぼすとの指摘も認められる。吉村（2007）は、大学生を対象として小学校から高校までの体育授業におけるいじめに関する調査を行った結果、学習指導要領に「協力」や「公正」などの態度の育成を目指すことが謳われている体育においても、授業中に「罵声」や「嘲笑」、「仲間はずれ」などの行為を見たり聞いたりした経験のある学生が、調査対象者の約 54%に及んだことを報告している。また賀川ら（1991）は小学 6 年生の体育授業において、行動規範

（マナー）に関する指導を行う実験群と行わない統制群を設定し、体育授業前後で参加者の行動規範に認められる変化について検討している。その結果、実験群では仲間を助ける、励ますなどの行動規範が肯定的に変化した一方で、統制群では行動規範が変化しないばかりか、低下したことを報告している。これらの研究結果は、運動・スポーツ経験であっても経験の仕方によっては必ずしも社会的態度の育成につながるわけではないばかりか、むしろ反社会的態度を助長する可能性すら含むことを示している。従ってこのような状況下にあるからこそ、運動・スポーツの指導に際して、社会的に望ましい行動規範の獲得を促す指導方略に関する研究（例えば、梅垣 2007）と共に、社会的に望ましい行動規範の獲得を促す運動・スポーツ活動の中身に関する研究が必要とされている。

本研究において開発した「なかま鬼」については、鬼ごっこへの参加後に、児童の援助自己効力感が肯定的に変化する可能性が認められた。「できるだけ長く鬼に捕まらないこと」や「鬼から巧みに逃げること」が技能の卓越を示す他の多くの鬼ごっことは異なり、なかま鬼では「自分が捕まるリスクを抱えつつも、できるだけ多くの仲間を助けるために行動すること」が技能の卓越を示す行動となる。また、他の鬼ごっこでは敏捷性に優れていることが技能の卓越を強く説明するが、なかま鬼では敏捷性に劣っていたとしても、動き方を工夫することによって仲間を助けることができる。従ってなかま鬼への参加を通じて、より多くの児童が他者を助ける経験を重ねることができる。

援助行動に関する研究では、過去の援助経験がその後の援助行動を促進することを示す研究が認められる。例えば妹尾（2001）は、過去に政府機関や各種団体によって実施されたボランティア活動に関する調査結果をまとめた結果、過去にボランティア活動を経験したことのある者は未経験者と比較して、今後のボランティア活動への参加意向が高いことを示し、実際の活動のなかに次の活動を動機づける要因が含まれていると指摘している。また高木・妹尾（2006）は高齢者大学の受講生 677 名を対象とした調査の結果、日常生活場面における援助・被援助経験の影響を受けて変容した援助・被援助に対する態度が、次の援助・被援助行動への動機づけに影響を及ぼすことを示している。

こうした先行研究の成果に基づくならば、なかま鬼に参加するなかで援助・被援助経験を重ねることにより、児童の援助・被援助行動を促進できる可能性がある。なかま鬼における援助・被援助経験が児童の援助・被援助行動に及ぼす影響については未だ不明な点が残されているが、今後多方面から検討することにより本メカニズムの解明が期待される。

なお本研究の結果は、なかま鬼において児童の援助自己効力感が肯定的に変化する可能性が窺われたが、お助け鬼ではその可能性は認められなかった。しっぽ取りについては援助行動を含んでいないことから、お助け鬼及びなかま鬼の効果を測定するための活動（統制群）として位置づけており、援助自己効力感の変容が認められないことは予想していた。しかし、お助け鬼となかま鬼は、逃げ手が 1 人もしくはペアで逃げるか及び、逃げられる広さが異なるものの、基本的なルールは同じである。本研究の結果のみで両鬼ごっこの効果を決定することはできないが、お助け鬼の効果が認められなかった原因について、鬼ごっこにおける援助・被援助頻度などの視点から今後も検討が必要である。

2. 援助自己効力感の肯定的変容を促進する要因

なかま鬼への参加前後の援助自己効力感の変化と援助・被援助行動との関係について検討した結果、児童の援助自己効力感の変化となかま鬼における援助・被援助行動との間に関係性は認められなかった。他方、なかま鬼への参加前後の援助自己効力感の変化と援助行動に伴う快感情との関係について検討した結果、有意傾向に止まるものの、両者の間に関係性が認められ、援助自己効力感が向上した群の児童は、非向上群の児童よりも援助・被援助行動を「楽しかった」と感じる傾向が認められた。これらの結果は、単になかま鬼における援

助・被援助行動が直接的に援助自己効力感と関係するのではなく、援助・被援助行動の結果に対する認知や援助行動に伴う快感情が、援助自己効力感と関係する可能性を示している。

妹尾(2001)は援助行動に至る過程について、過去の援助経験が直接的に次なる援助行動に対する動機づけを高めるのではなく、援助行動の効果に対する認識(役に立ったのかどうか)を通じて援助行動に対する動機づけが高まるとするモデルを提示している。また松井・浦(1998)も、被援助者が援助を受け入れた後、返礼行動を起こすまでの過程に、援助行動に関連して生じる快・不快感情が介在することを想定しており、援助・被援助行動の後の行動については、援助行動時に受ける感情が関係しているようである。例えば仲間を鬼から守った際に受けた「ありがとう」という言葉が、援助行動に対して楽しさやうれしさなどの感情を喚起することにより、次回の援助行動に対する動機づけを高めたり、援助自己効力感を促進するとも考えられる。

自己効力感に関する先行研究に照らすならば、自己効力感の促進に最も大きな影響を及ぼすのは「遂行行動の達成」である(Bandura, 1977)。従って、援助自己効力感を促進する上では援助経験を重ねる必要があると考えられる。しかし援助行動が成功、つまり遂行行動の達成であったのかどうかは、援助行動の効果に対する認知からの影響を受けると考えられる。なかま鬼に援助・被援助行動を経験する場としての機能を期待するのであれば、児童が援助行動を行った場合にそれが成功したのかどうかを明らかにするために、児童間のコミュニケーション(ありがとう、助かったよ、などのかけ声)を促進する働きかけも必要であると考えられた。

まとめ

本研究では、本研究者が実施している学童保育活動(キッズサポート)に参加した小学校 2・3 年生児童を対象として 3 種類の鬼ごっこを実施した。そして援助行動に注目した鬼ごっこである「なかま鬼」への参加前後における援助自己効力感の肯定的変化について、他の 2 種類の鬼ごっこと比較を通じて検討した。その結果、「しっぽ取り」及び「お助け鬼」への参加前後では児童の援助自己効力感に有意な肯定的変容は認められなかった一方で、「なかま鬼」への参加前後では児童の援助自己効力感の肯定的変容が有意に認められた。また、児童の援助自己効力感が肯定的に変容した群は非変容群と比較して、援助・被援助行動を「楽しい」と感じた児童が多い傾向が認められた。

本研究の対象者数は 20 名程度と小数であることから、結果の解釈には限定が伴うものの、「なかま鬼」への参加前後を通じて児童の援助自己効力感が肯定的に変容する可能性があること、また援助自己効力感の肯定的変容は「楽しい」という援助・被援助行動に対する快感情を伴う傾向があることが明らかになった。

様々な問題が噴出する現在の学校教育において、学校体育を中心とする運動・スポーツ活動には運動・スポーツ技能や体力の向上だけではなく、道徳性や社会性の獲得に対する貢献が求められている状況にある。本研究において開発された「なかま鬼」は、社会的に望ましい行動規範の一つである援助行動の獲得を促すことのできる運動・スポーツ活動であると考えられた。

付記

本研究は、JSPS 科研費(基盤研究 C: 課題番号 25350724)の配分を受けて実施されました。

文 献

Bandura, A.(1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84: 191-215.

Hellison, D. (2003) Teaching Responsibility through Physical Activity. Human Kinetics: Champaign, IL.

石川芳子・小林正幸（1998）小学校における社会的スキル訓練の適用について．カウンセリング研究，31: 301-309.

賀川昌明・石井源信・岡澤祥訓・米川直樹（1991）スポーツゲームにおける行動規範の研究-小学校体育授業における意識変容への実験的試み-．鳴門教育大学研究紀要（生活・健康編），6: 21-37.

加賀谷熙彦（1998）これからの運動部活動の基本的な在り方．スポーツと健康，30(5): 7-10.

松田岩男（1985）スポーツを通しての人間形成．健康と体力，10: 7-10.

松井豊・浦光博（1998）人を支える心の科学．誠信書房：東京．

永井暁行（2011）援助行動に関する研究の動向と課題．中央大学大学院研究年報，40: 53-69.

桜井茂男（1986）児童における共感と向社会的行動の関係．教育心理学研究，34: 342-346.

妹尾香織（2001）援助行動における援助者の心理的效果．関西大学大学院人間科学：社会学・心理学研究，55: 181-194.

高木修・妹尾香織（2006）援助授与行動と援助要請・受容行動の間の関連性-行動経験が援助者および被援助者に及ぼす内的・心理的影響の研究-．関西大学社会学部紀要，38(1): 25-38.

田崎敏昭（1993）児童・生徒の向社会的行動-援助行動と分配行動-．佐賀大学教育学部紀要，41(1): 135-148.

友添秀則（2005）体育はなぜ必要か-体育の存在意義を考える人間形成の立場から-．体育科教育，53(10): 62-65.

友添秀則・梅垣明美（2007）体育における人間形成論の課題．体育科教育学研究，23(1): 1-10.

上田憲嗣（2007）豊かな運動感覚を育む低学年体育の在り方-コーディネーション能力の育成を構想する-．体育科教育，55(10): 36-39.

上野耕平（2014）児童の援助行動に対する自己効力感を促進する鬼ごっこ(なかま鬼)の開発．スポーツ教育学研究第34回大会号: 94.

梅垣明美（2007）いま，体育で人格教育を行う意義とは．体育科教育，55(4): 22-25.

梅垣明美・草島進之介・上谷浩一（2011）中学校における責任学習モデルの効果に関する実証的研究．体育学研究，56: 157-172.

梅垣明美・友添秀則（2010）JTPE 掲載論文にみる体育における道徳学習と責任学習の研究動向．スポーツ教育学研究，29(2): 1-16.

梅垣明美・友添秀則・小坂美保（2006）体育における人格形成プログラムの有効性に関する研究．体育科教育学研究，22(2): 11-22.

吉村功（2007）体育は「いじめ」にどう立ち向かえるか．体育科教育，55(4): 14-17.

吉村真理子（2003）児童の「向社会的行動」測定の試み．千葉敬愛短期大学紀要，25: 119-134.